

東京洋傘

奥田正子



小学生の頃よりものづくりに魅せられ、
辿り着いた傘作りの世界。豊かな発想と感性で
世界にただ一つの洋傘を生み出す。

おくだまさこ ●
1947年生まれ。株式会社市原代表取締役会長。
2019年、東京都伝統工芸士に認定。
東京都中央区日本橋茅場町 2-17-9



上／親骨の関節部分の装飾と保護を兼ね、生地を縫い留める「ダボ巻」の工程
下／傘の開閉する際につまむ「ろくろ」を生地で包む「ろくろ包み」



店頭に並び「ラムダ」の傘。生地の色柄、持ち手のデザインなど、装いのアクセントになるものばかり

顧客の希望を叶える、 唯一無二の一本

伝統技術を残したい その想いから洋傘職人に

茅場町駅から徒歩二分の場所に、オリジナルブランド「ラムダ」を展開する「株式会社市原」がある。洋傘を中心にサスペンダーやベルト、革財布などの服飾小物の製造卸を行う同社の代表を務めながら、伝統工芸士として洋傘製造も担っているのが奥田正子さんだ。奥田さんの父・正康さんが興した「市原」は昭和四〇年代、人々が憧れたヨーロッパの服飾小物をいち早く取り扱う。デザイン性に優れた紳士用のファッション傘を当時より生み出し、人気と注目を集めた。

小学生の頃からファッションに関心を持ち、ミシンを操って自身の洋服を作っていたという奥田さん。



洋傘の伝統技法を受け継ぐ奥田さん。現在も職人育成と伝統継承のために職人養成講座の講師をしている

服飾の専門学校を経て、編み機メーカーのデザイン、制作を手掛けた。洋傘を作り始めたのはニットデザインの際、市原で事務職として働いていた三八歳の頃。職人の減少・高齢化が業界全体で深刻になりつつある中、匠の技を受け継ぎ伝えていくことを決意。職人のもとを訪ね、その技術を学ぶ日々が始まった。「傘作りは未知の世界でしたが、子どもの頃からミシンはお手のもの。実際に作り方を見せていただくと、その要領が自然と頭に入ってきた。それに、職人は木型を師匠から受け継ぎ、その木型を活かして傘作りを行うのが一般的ですが、それまでニットの立体的なデザインばかり考えてきたので、傘の骨を見ると型をどのように作ればよいか？自然と浮かんでくるんです。好きこそもの上手なれ、ですね」と奥田さんは微笑む。

二〇一九年に東京都伝統工芸士に認定された奥田さんが現在手掛けるのは、顧客の希望に沿った一点ものの傘。縮緬や大島紬など、様々な生地を傘に仕立てる。「型を厚紙で作るのですが、毎回形も違いますし、当然生地によって伸び率も違う。大変といえば大変ですが、毎回新鮮な気持ちで向き合えるのが嬉しい。こうしたことができるのも、林（康明さん。東京都伝統工芸士で、同社の製造責任者）をはじめとする皆

がラムダの傘作りを支えていてくれるから。ありがたいですね」

奥田さんに今後の目標を伺うと、「ものづくりの楽しさを伝えること」と返ってきた。「傘作りを志す若い職人さんもちろんですが、お子さんや一般の方も参加できる教室も開いているんです。今は傘作りのキットも売っていますし、日傘ならば手拭いを再利用しても自作することが出来る。ビニール傘を再利用すれば、テーブルマットにも生まれ変わるんですよ。ビニール傘は特に「安いから捨てても良い」「壊れたら買い替えれば良い」と思われがちですが、自分の手を動かして作ったものならば愛着も湧きますよね。傘をきっかけにして、少しでも気持ちが豊かになる。そんな方法を伝えたいんです」